

学生間の交流／学生・教員間の交流

木村 哲雄（1期）

1956年4月、薬学科一期生として40人(男子28名、女子12名)が顔を合わせた。年齢も最大5歳位の開きがあったが、これが学生同士、学生と教員間の交流に大いに役に立ったと思う。先生達と同年代か少し年上の生徒もいたので、学業では先生と生徒だが、その他では兄弟姉妹の様な雰囲気が生まれた。

3年の実習時には、ガスの火力が弱く日中は殆ど実験ができず、夕方以降に強火のガスを使えたので、近くの店で大判焼きを買い、実験室で分けて空腹を満たしたことも数多く、この時代から一体化が生まれた。余談ながら、同期生同士のカップルも誕生し、先生とのカップルも誕生した。

学生と教員間の交流は、薬学科発足当初から始まった。暇な時間には芝生でだべり、一緒に遊ぶことも多かった。特に、3年の夏には一緒に支笏湖キャンプを楽しんだ(写真-1)。学生と一緒にテントを張ったり食事の

準備等をしたりで、学生と教員間の親密感が増した。その他にも、空沼岳への登山、少人数での大雪山登山、日高山脈縦断等、学生と教員と一緒に行動した例も多かった。また、学生同士や学生と教員が同じ下宿(2食付き)で24時間一緒に過ごしたことも、良い思い出となった。

時間的な余裕が作れる様になって、1985年から同期会を開催する様になった。特に、卒業30周年を記念した1988年の同期会には、伴教授 他諸先生にも参加して頂き、定山溪で久しぶりの対面と、昔話を華を咲かせた。

その後、定期的に同期会を開くことになり、1998年の福島(写真-2)を皮切りに、2年毎に本州と北海道を交互に訪問する旅行会が始まった。北海道の場合には、薬学創立50周年に合わせて実施し、2018年横浜(写真-3)を最後にコロナ禍で中断となった。また、本州在



住者は年 2 回春と秋に東京を、以前は夕食会、最近は昼食会を催し絆を深めていたが、今はコロナ禍で全てが中断されている。

薬学創立当初の学生達は、若い先生達との交流で人

間的にも成長したのではないだろうか。振り返って見ると、本当に幸せな時代であった。

同窓会 HP:2022 年 8 月 5 日公開

